

幻想と怪奇

レイブラッドベリ他

1

仁賀克雄

編



ハヤカワ文庫 N V
〈N V91〉

レイ・ブラッドベリ他

幻想と怪奇

①

仁賀克雄編

早川書房

287

THE WOMEN
And Other Stories
by
Ray Bradbury

目次

淋しい場所……………オーガスト・ダーレス…七

ポオ蒐集家……………ロバート・ブロック…二三

女……………レイ・ブラッドベリ…四七

すっぽん……………パトリシア・ハイスミス…六七

アムンゼンの天幕……………J・マーチン・リーイ…九一

夢売ります……………ロバート・シエクリイ…一二三

繭……………ジョン・グッドウィン…一三五

二年目の蜜月……………リチャード・マシスン…一六一

無料の土……………チャールズ・ボーモン…一七七

あたしを信じて……………デイヴィス・グラッブ…一九五

植民地……………フィリップ・K・ディック…二二三

エレベーターの人影		L・P・ハートリイ	二四七
はやぶさの孤島		ジョン・クリストファー	二五七
水槽		カール・ジャコビ	二七九
編者あとがき			二九

幻想と怪奇

①

淋しい場所

オーガスト・ダーレス

怪物というのはとなく恐怖心にかられた妄想が産みだしたものである。想像力豊かな子供が創りだした怪物は、大人の空想より恐ろしいものである。遙かな昔の遠い思い出を辿って、幻想と怪奇に充ちたこの小品を書いたのは、アメリカ作家オーガスト・ダーレス（一九〇九—七一）で、アメリカの怪奇小説の主流をなしたアーカム派の創始者であり、SF、歴史、推理、伝記などに筆を振り、百冊を越える著書を残している。

本作品は一九四八年二月号の『フェイマス・ファンタステック・ミステリーズ』誌に掲載されたものだが、彼の代表作であり、六二年にアーカム・ハウスから出版された短篇集“*Tales from the Lovecraftesque Places*”の表題にもなっている。

夜のあいだ家の中でくつろいでいる人、劇場の椅子に坐っている人、ダンスやパーティを楽しんでいる人——つまり四方を壁に囲まれている人たちは、外の闇の中で何がおこっているかをまったく考えない。淋しい場所では何がおこっているかを。そして、そういう場所は田舎にも、小さな町にも、都会にも、数かぎりなくある。もしあなたが、宵の口や深夜に外へ出れば、そういう淋しい場所があることを知り、そこを通りすぎ、おそらく不思議に思うだろう。そして、もし、あなたがまだ年端のゆかない子供だとしたら、きっとこわい思いをするだろう……ちよんどジョニー・ニューウェルとわたしはそうだったし、国中の何千何万という子供たちが、夜ひとりで外へ出て、暗く無気味な淋しい場所を通らなければならないときに、そういうこわさを味わっている……

これだけはわかってもらいたい。穀物用のエレベーターのあるあの淋しい場所さえなかったら、老木がそびえ、歩道のそばまで物置小屋が立ち並び、材木を山のように積みあげたあの場所——あれさえなかったら、ジョニー・ニューウェルとわたしが人殺しの罪をおかすこともなかつ

たろう。たとえば法律ではどうすることもできないとしても、わたしはそれを言わずにいられない。法律はわたしたちに指一本触れることができない。しかしそれは実際におこったことであり、わたしも、ジョニーも、それを知っている。ただわたしたちは決してそのことを人には話さない。そんなものは見なかったふりをして、心の奥底に深くしまいこんでいる。でも、やはりそれは、否定できない事実なのだ。

もうずいぶん昔のことだ。しかし、時の流れ全体からすれば、それほど遠い昔でもないかもしれない。わたしたちは小さな町に住む幼い子供だった。ジョニーはわたしの家から二軒隣の通りむこうに住んでいた。わたしたちの家はどっちも穀物用エレベーターの西側の一画にあった。その淋しい場所も、ジョニーと一緒になら全然こわくなかった。だが二人一緒ではないことがたびたびあった。どちらかがひとりでそこを通らなければならぬことがよくあった。わたしはたいていその場所を通った——町の中心へ行くには、そこを通らないとひどいまわり道になってしまうのだ。父が疲れていて自分ででかけられないとき、わたしがかわりにその道を歩いて行かなければならなかった。

それは、夕方こんな具合にはじまる。母が砂糖か塩かボローニャ・ソーセージをきらしてしまつたことに気づいて、こんなふうに話しかける。

「ステイヴ、町へおつかいに行ってきたらちょうだい。お父さんはとても疲れておいでだからね」

そんなとき、わたしは答える。

「行きたくないよ、ママ」

「行つてらっしゃい」

「あすの朝学校へ行く前に行つてきてあげるからさ」

「いけません。おとなしく言うことをきくんですよ。ほら、お金」

こうしてわたしはとうとうおつかいに行かされるはめになる。

往きはそれほどこわくない。西の空に夕焼けの余光がたゆたい、昼間の一部が立ち去りかねているかのように、かすかな明るさが残っていることが多いからだ。それに、町のそこかしこで、最後のひとときを夢中で遊びまわる子供たちの声も聞こえてくるから、ひとりぼっちという感じはしないし、大木の下の暗い場所を通るときもそれほどこわい思いをしなくてすむ。いけないのは帰り道だ。そのころは夕焼けもすっかり消えている。星が出ていても木にさえぎられて見えない。四辻の上にのびている昔風の街燈に灯がともっても、エレベーターの近くの淋しい場所まではおよそ半ブロックにわたって、黒々とした闇の中に横たわっている。立木が路上にあやめもわかぬ影を落とす、遠く道のはずれに、街燈がかすかな光を投げかけている。反対側のつぎの四辻の街燈も、やはりここまではとどかない。

この場所にさしかかると、しだいに足どりが遅くなる。そこまでは道の両側に明るい店が立ちならび、窓に明りのともった家々からは、音楽や、ポーチでおしゃべりする人々の声が聞こえてくる——だが、そこからさきは、問題の淋しい場所で、近くに家は一軒もなく、その向うには穀物のエレベーターが黒々と無気味なシルエットを浮かびあがらせている。立木の間や、納屋の中や、材木のかげには、何か恐ろしいものがひそんでいるかもしれない。夜あなたがそこを通りかかると、物かげからとびだしてあなたに襲いかかり、あなたをずたずたに引き裂いて、口では

言えないような恐ろしいことをしてから、あなたを殺すかもしれない。

これがその淋しい場所だった。昼間見れば樹齢百年をこす樫と楓の大木が立ちならび、手をのばせばとどくほど低く下枝が拡がっているだけだ。納屋や材木置場ではめったに人の姿を見かけることもない。歩道のそばまで長い草が生いしげり、秋の終りにだれかが枯草を焼くまでは、その草を刈る人もいない。暑い夏の日には、ひんやりした空気のただよう日かげになる。昼間なら少しもこわくはないが、夜になると様子が一変する。物の形も見えなければ音も聞こえない場所、暗い無気味な場所、子供たちにとってはもろもろの妖怪がうごめく恐怖の場所に一変する。

夜町から家へ帰ってくるときは、いつもこんなふうだった。わたしの足どりは、この淋しい場所へ近づくにつれてしだいに遅くなる。わたしはあらゆるまわり道を思い浮かべる。だれか一緒に歩いてくれる人が通りかかってくれないかと願う。この道のもっとさきに住んでいるニューウエルさんかミセス・ポッターでもいいし、穀物用エレベーターのあるブロックのはずれに住んでいる牧師のビスラーさんでもいい。しかし、その願いが叶えられたことは一度もない。この時間は夕食後間もないので外出には早すぎるし、すでにでかけた人はまだ帰ってはこない。だからわたしはゆっくりと淋しい場所のはずれまでたどりつき、それから全速力で走りだす。時には目をつむったままで走ることもある。

わたしはそこに何がいるかをちゃんと知っていた。暗い、淋しい場所に何かがいることを知っていた。それはおばけ男かもしれない。暗い場所で悪い子供を待っているおばけ男の話を、祖母がしょっちゅうしてくれたものだった。あるいは人食い鬼かもしれない。それならおとぎばなしの絵本でよく知っていた。いや、それ以上に恐ろしいものが待っているかもしれない。わたしは

走った。全速力で走った。わたしの体に触れた草や木の葉一枚、小枝一本が、わたしをつかまえるようとしてのびてくるそいつの手だった。歩道に響きわたるわたしの足音は、追いつがってくるそいつの足音だった。わたし自身の吐く息が、わたしをつかまえて八つ裂きにし、わたしの心に恐怖を吹きこもるとするそいつの荒々しい呼吸になった。

わたしは疾風はやてのような勢いでその場所を走り抜け、無気味なエレベーターのそばを通りすぎる。そのまま見なれた街燈の黄色い光の中へ無事にたどりつくまで立ちどまらない。そこから二、三歩行けば自分の家だ。

すると、母がこうわたしに話しかける。

「おやまあ、こんな暑い晩に走って帰ってきたのかい？」

「急いでたからさ」と、わたしは答える。

「そんなに急ぐことはなかったんだよ。朝ご飯までに間に合えばよかったんだから」

「そんならあすの朝だってよかったのに。ご飯前にひとつぱしり行ってきたのにさ。このつぎからはそうするからね」

しかし、だれもわたしの言葉に耳をかしてくれない。

ジョニーもときどき夜になってから町へ行かされることがある。昔は近ごろとちがって、女たちが日課のように町へ買物をしにいき、必要な品物はめったに忘れない、というようなことはなかった。女たちはたまにしか町へ行かず、でかけてもあまり買物の数が多いので、たいてい何かを忘れてきたものだ。たまたまジョニーとわたしと同じ晩にあの淋しい場所を通ったことがわかれると、つぎの日二人で情報を交換し合ったものだ。

「何か見えたかい？」と、彼がたずねる。

「ううん、だけど物音がしたよ」

「ぼくは手でさわってみた」と、彼は緊張して小声で囁く。「そいつの足は大きくて平べったいんだ。いちばん醜いのはなんの足だか知ってるかい？」

「知ってるとも。いやな匂いのする黄色いスポンの足だろう」

「そいつの足はスポンにそっくりなんだ。ぞっとするほど醜くて、ぶよぶよしていて、そのくせ鋭い爪が生えていた！ そいつを横目でちらっと見たんだよ」

「顔も見たいかい？」

「顔なんかなかったよ。ぼくはびっくりしたな。だけど、顔があつたらもつとこわかつたろうな」

ああ、その恐ろしい怪物——動物でもなければ人間でもない——は、淋しい場所に身をひそめて、わたしたちをとって食おうと待ちかまえているのだ。怪物はこうしてジョニーとわたしの経験から生まれ、育っていった。わたしたちはそいつが竜のように鱗をはやし、大きな長いしっぽを持っていくことを知った。そいつはどこからか火のように熱い息を吐きかけるのだが、顔も口もなく、喉のあたりに恐ろしい穴がぼっかりあいているだけだった。体の大きさは象ほどもあるが、象のように親しみは持てなかった。そいつはあの淋しい場所に住みついたままはなれようとしなかった。そこで、不注意な子供たちが暗くなつてから通りかかったら、とって食おうと待ちかまえているのだった。

夜になつてからこの淋しい場所に近寄ることを、わたしはどれほど避けようとしたことか！

「どうしてマディを行かせないの？」と、わたしは質問する。

「マディはまだ小さすぎるからよ」と、母が答える。

「ぼくだってそんなに大きくないよ」

「ばかおっしやい！ おまえはもう大きな子供ですよ。もうすぐ七つになるんだからね。考えてもごらん」

「七つじゃそんなに大きくないと思うんだけどな」と、わたしは答える。これは本音だった。七歳という年齢は、あの場所の恐ろしさに耐えられるほどまだ大人ではない。

「でも、シアーズ・ローバックで買ったおまえのズボンは、ずいぶん長いはずだけどね」

「ズボンなんかどうだっていい。とにかく行きたくないんだよ」

「そんなこと言わずに行ってきたらどうだい。どうせ朝ご飯前に行くほど早おきはできないんだから」

「ちゃんとおきるよ。約束するからさ、ねえママ！」と、わたしは涙声で叫ぶ。

「あすになればどうかわかるもんですか。だめよ、すぐに行ってきたらどうだい」

いつでもこんな具合だった。わたしはとうとう町へ行かなければならなくなる。わたしの気持ちを察しているのはマディだけだった。

「弱虫」と、彼女は囁く。そのマディさえ、ほんとのことはわかっていなかった。夜になってから、あの淋しい場所を通ったことなど一度もないからだ。彼女は夜になると一步も外へ出なかった。だから、歩道にせりだした老木の下枝に何かが隠れていて、通りかかる子供に音もなく襲いかかり、八つ裂きにすることを知らないのだ。顔もなく、鋭い爪のあるスッポンのように醜い足

を持ち、竜のような鱗としっぽをはやし、その暗闇と同じように全身黒一色で、家のように大きな体をした怪物がそこに隠れていることを、マディは知らない。

だがジョニーとわたしは知っていた。

「ゆうべはもう少しであいつにつかまるところだったぜ」と、彼は薪小屋からこわごわ外を眺めながら、まるでそいつが聞き耳をたてているかのように、低い声で話しかける。

「つかまらなくてよかったね」と、わたしが答える。「で、そいつはどんなやつだった？」

「すごく大きくて真黒だったよ。走りながらふり向いたら、うしろの街燈が見えないんで、そいつに追っかけられていることがわかったんだ。ぼくは夢中で逃げたよ。ほんとに危ないところだった。これを見てくれよ！」

彼は怪物の爪でかきむしられたシャツの裂け目を示す。それから、目を輝かせて興奮の面持でたずねる。

「きみのほうはどうだった？」

「ぼくがあすこを通ったとき、そいつは材木のかげに隠れていた。ぼくを待っていることがちゃんとわかったよ。ぼくは夢中で走ったけど、そいつも追っかけてきた——ほら、あすこの材木がくずれているだろう」

それから、二人して真昼のその場所へ行き、様子を見る。たしかに材木の山はくずれているし、そいつが横たわっていた場所は、草が押しつぶされている。ときどきそこでハンカチを見つけて、たぶんだれかがそいつにつかまったのかもしれないと考える。それから家へ帰って、だれかが行方不明になったという噂を待つ。帰る道すがら、そいつにつかまったのはマディかクリSTEIN